

# 日常の中に潜む 「巧まざる造形」を

## 鑑賞する

八馬  
智

HACHIMA  
Satoshi

い位置にあるため、結構な高低差を乗り越えなければならぬ。その高さに至る経路には、歩行者と自転車の通行に配慮しながら、周辺環境と整合するようにステップとスロープを組み合わせる必要がある。さらに地下に埋設されている排水管などの整合性を確保し、メンテナンス用のハンドホールも複数設置しなければならぬ。その他にも複雑で厳しい条件がありそうだ。そのような事情が重なった結果として生み出されたフォルムは、そもそも立体造形の面白さなどまったく意図されていないだろう。ところが見方によっては愛おしさすら感じられ、鑑賞に資するものとなっている。

筆者はこのような街中の物件を「巧まざる造形」と称して写真によって収集し、観察を重ねることでその成立要因を考えつつ、存在していない「作家の意図」をあれこれ勝手に妄想しながら鑑賞している。なんてことはないと思いついでいた日常の風景にあらためて意味を付与する行為が続いていると、未知の知の領域に踏み込むような感覚におちいることがある。いくつか例を見てみよう。地下歩道の壁面(写真②)、住宅の塀(写真③)、ビルの外壁(写真④、写真⑤)、ビルの屋上(写真⑥)、地下駅の出入口(写真⑦)など、見慣れているようでいて、見過ごしている風景もあるのではないだろうか。

そもそも、こうした観察行為は筆者独自の



■写真①：千葉市 | 2016

わが家の近所には、局地的な豪雨によってたびたび氾濫の危険にさらされてしまう小さな水路があり、そこに簡易な歩道橋が架かっている(写真①)。なにも気にしなければそのまま通り過ぎる日常の風景だろうが、ある日、アプローチの階段に妙な魅力が宿っていることに気づいてしまった。荒々しいコンクリートが層状になり、複雑な水平・垂直のラインが生み出されるのだ。その中央を斜めのラインが力強く貫いているのだ。その気になって観察していると、野性的な緊張感を創出してコンクリートという素材の可能性を拡張するかのような立体造形の面白さに、ついつい魅了されてしまった。

この階段が成立した背景を考えてみよう。歩道橋が架かる水路の護岸は周囲の地盤よりも高



■写真②：千葉市 | 2022

道路をくぐる地下歩道の壁面に、微妙に濃淡が異なるブルグレーが、四角や三角の幾何図形で描かれている。そのエッジはややぼんやりしている。おそらく落書きをする不届き者と、治安を維持する行政側の長年にわたる格闘の末に産み落とされた抽象絵画であろう。それはあたかも、有機的で奔放な人間の内面を、社会性のある定型に押し込めている様子を表現した、社会のエッジの参加型インスタレーション作品だと解釈できるかもしれない。



■写真③：氷見市 | 2015

雨水をアクションペインティングのように利用した、美しい汚れの事例。下見板のように断面が斜めになっている塀の上に載せられた瓦を伝った水滴が、長い時間をかけてゆらぎのあるリズムカルな文様を柔らかく描いている。最下段にはクラックが描く微細な線と雨水の跳ね返りによる斑点が、見事な山水画を描いている。さらに、水平方向の段差によるシャープな陰影が強烈なコントラストを生み出し、雨だれの自然な振る舞いを強調している。

のではなく、最近始まったことでもない。有名などころでは、赤瀬川原平らによる「超芸術トマソン」や林丈二や藤森照信らを含めた「路上観察学会」の諸活動が一九八〇年代を中心に行われ、それらの手法や論理につながる「考現学」は今和次郎や吉田謙吉らにより一九二〇年代から始められた。その他にも数多くの観察者たちが、都市の表層に立ち上る現象を観察し、ユーモアを伴ったシニカルな視線で読み解くことで、人々の価値観や社会が変容する様相を捉えてきた。筆者は先人たちの観察行為を参照しながら、自分の興味を交えて鑑賞に結びつけているに他ならない。

その一方で、ICT技術によりデジタルデータが手軽に扱えるようになった現在、街中のあらゆる風景は格段に採集しやすくなった。考現学ではスケッチ、路上観察学ではフィルムカメラによる写真が主な記録のツールとして使われていたが、現在は写真のデジタル化が進み、スマートフォンに組み込まれたカメラはポケットの中に常に入り、位置情報や深度情報なども複合的に組み合わせられるようになり、動画や三六〇度写真なども手軽に扱えるようになってきた。つまり、観察のツールは進化し続けているのだ。

筆者にとっては、コストを気にせず大量の画像を撮影、保存、共有できることになったデジ

■写真④：熊本市 | 2017

かつてあった隣家の木造二階建ての家屋のフォームを、コンクリートブロックによる図像として鮮やかに浮かび上がらせている壁面。ビル外壁全体をキャンパスに見立てると、テクスチャーの差異の現れ方が絶妙なバランスで構成されていることに気づく。ベニヤ板によってふさがれた窓、モルタルの奥にうっすらと感じられる柱と梁の存在、木造家屋の名残かもしれないやつれたトタンなど、見れば見るほど味わい深さが増してくる。



■写真⑤：ニューデリー | 2019

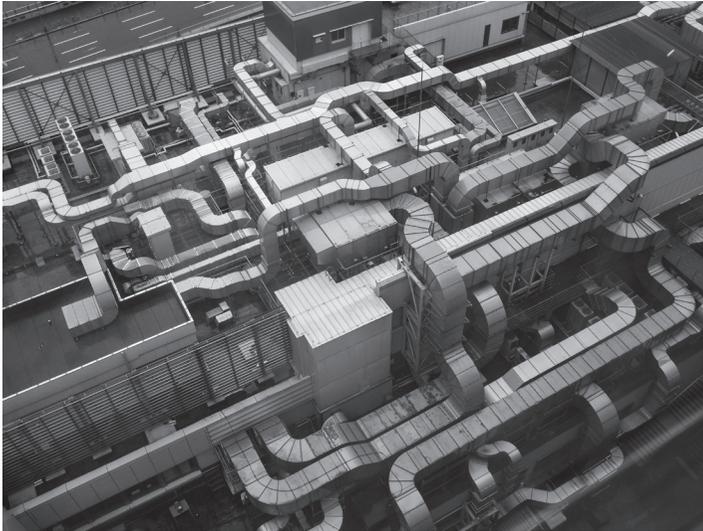
グリッドで仕切られたファサードの様相を細部までじっくり観察すると、室外機の配置、窓枠の構成、塗装の有無など、枠ごとに独自の世界が形成されていることがわかる。つまり、それぞれのユーザーの自由奔放な使いこなし手法が見て取れる。緻密に計画された秩序の中からふつふつと湧き上がる彩り豊かな自由意志や多様性が、この曼荼羅のようなビル外壁に現れているのではないだろうか。



タルカメラとSNSの登場が、極めて大きな転換点になった。そこから写真は単なる情報媒体ではなく、記憶を補完しながら観察の精度を高め、思考を続けるための重要な装置として身体化したと感じている。しかもそれは、多くの人に開かれたものである。その機会を活かして、あらためて街中の風景を読み解く行為を思考のトレーニング手法として捉えることは、とても有効なのではないだろうか。

人は無意識に自分の見方を固定してしまい、そこから脱却できずに行き詰まることもある。だからこそ、見方をわずかに変えるだけで、それまで見えなかった姿が浮かび上がる体験に感激できる。ものの見方を変えるという行為は、ちょっとした気分転換にもなる。新たなアイデアのゆりかごにもなる。ものごとの多様性に気づき、他者や自分に優しくなることもある。つまり、様々な場面でもとても重要な行為なのだ。巧まざる造形の鑑賞は、新たな世界を認識して自分を拡張するための方法を、手軽に獲得させてくれる可能性がある。

具体的には、街中で気になった対象をさまざまな角度や距離から眺めて写真に収め、それが成立している理由を考えながら、ひとつひとつ抽象的に捉え直す。そのために、言語化を繰り返す、因果関係を整理する、背後にあるパターンを見抜く、時間や空間のスケールを変える、ア



■写真⑥：大阪市 | 2015

ビルの屋上に張り巡らされたパイプやダクト。建物は通常、骨と皮によって内部に空間を生み出すが、動物が生体としての機能を保つための内臓や血管のように、内部環境を健全にするための気体・液体・電力などを効率的に伝える設備が必要となる。裏側がない建物は屋上がバックヤード化して内臓が露出しやすい。ややグロテスクではあるが、都市の断面を鑑賞する貴重な場面として機能している。



■写真⑦：デン・ハーグ | 2014

地下駅の出入口に縦格子の柵があり、その脇に転倒しないように駐輪された自転車の車輪たちがはめられている。駅を降りて階段を登ると、頭上に半円が水平方向にゆらぎを伴いながら並び、やや圧迫感がある摩訶不思議な空間が視認できる。おそらく、設計者の意図を外れて、ユーザーが主体となって発展的な使われ方がなされているのだろう。観客との相互作用によるインタラクティブアートのような関係が構築されている。

ナロジを用いて置き換えるなど、さまざまなアプローチで観察する。それを続けているうちに、鑑賞の素地ができるだろう。そうなれば、見慣れた街中に次々と新たな風景が立ち上ってくるはずだ。

なお、巧まざる造形は「境界」に生じやすい。たとえば、高低差がある地形と人工物との境界に、内側と外側という空間的な境界に、古いものと新しいものの時間的な境界に、此方と彼方という意味的な境界に。さまざまな制約や機能が交錯する難しい状況を乗り越える場面には、多種多様な試行錯誤が蓄積されやすいのだろう。そのあたりに着目して街中を観察すると、面白い物件が目に入りやすくなる。

都市の日常に埋もれた巧まざる造形は、うっかりしていると見逃してしまう。それらを掘り起こして成立要因を妄想することは、都市の見方を捉え直す好機となり、自分の中に新たな知の領域をつくることにつながるだろう。

(はちま さとし・千葉工業大学創造工学部教授)  
著書に、『日常の絶景——知ってる街の、知らない見方』(学芸出版社、二〇二二) など。